

たんぽぽのお酒 ● 石田郁男

たんぽぽの**毳**がすうつと飛んできたいっしょうけんめい力をぬいて
夕暮れよせる湿地にひとひらのひとひらのかぜが渡っていった
真夜中に起きたマミーはヨガ座り体温計をわきにはさんで

ニンゲンはと呟きそうになりながらコップの水でグツと飲みこむ
川岸のユダの木が見つめてる奸物のわれを見透かすように

役立たずの何かにあこがれていくがいい千鳥足の風船のように
見上げつつサクラはバラ科とマミーが言うもともと返事は期待してない
ワッツアップでママンが雇ったウイルスの絵を映しおりマミーのスマホが
耳オレイヤが男か女かわからずに五十年たつてもまた直される

スガンさんの山羊さんのように外出は長さ一キロの紐につながれ
南風は空の高みにのぼりゆきひばりの秘密をそっと覗いた

海原のように広がる空の下で来る日もくるひも待つ麦畑
数々の疫病を見たジエ水道の千九百回忌の春に立ち合う

幼きよ見よ櫛の樹が青空と雲のはなしに聴きいつてる

幼きよ風の歌を聴けたんぽぽのお酒ができる日は窓を開け
幼きよ畑のじやがいもを思い出せ腹がへつたらそを食えばいい

森かげでおおきい幹が空をさす小さな草が大笑いして

千葉にいる長女が不安をつぶやいたわれはグーグルの現在地にいる
蒲公英トウモロコシの季節はすぎた舞う風に飛びたつ前にやすませてくれ

飛んでいく**毳**のなかには恋をしてそのまま死んでいくものもある